

ミクロネシアの民俗文化のエスノヒストリーの研究

著者	須藤 健一
雑誌名	民博通信
巻	22
ページ	30-36
発行年	1983-11-21
URL	http://hdl.handle.net/10502/5151

ミクロネシアの民俗文化の エスノヒストリーの研究

須藤 健一

一、目的

第二次世界大戦後、ミクロネシア地域における人類学・民族学の調査研究は、アメリカおよび日本の研究者の手によって進められてきている。一九四五年以降、グアム島、ナウル島とギルバート諸島を除くミクロネシアの島々は、アメリカ合衆国の信託統治領となった。日本の三〇年間にわたる委任統治をひき継いだアメリカは、一九四七年から四九年にかけて、海軍省の企画のもとに、多くの人類学者をミクロネシア地域に派遣して、人類学的な総合調査を実施した。この大プロジェクトには、Coordinated Investigation of Micronesia (C. I. M. A.) の名がつけられ、G. P. Murdock, W. H. Goodenough, D. M. Schneider, J. L. Fischer, M. Spiro K. P. Emory など高名な人類学者が参加した。ミクロネシアの六つの行政区ごとにおこなわれたこの調査の成果は、一九四九

年から、C. I. M. A. Report というシリーズ・タイトルのもとに、民族誌風の体裁で順次報告され、その数は三〇冊にのぼっている。それ以降も、アメリカの多くの大学から、学位取得を目的とする若手研究者が、前記の人類学者たちの指導をうけ、ミクロネシアの島々で実地調査をおこなった。それらの成果は、学位論文ないしは、学会誌上で我々の目にするところである⁴⁾。

このように、戦後のミクロネシアにおける人類学の研究は、アメリカの研究者のイニシアティブのもとに着手されたが、一九六〇年代からは、日本の若手人類学者が、戦前の日本統治時代に公にされた日本人研究者の成果をふまえて、ミクロネシア各地で調査活動に従事するようになった。戦前のわが国のミクロネシア研究には、今西錦司編『ボナベ島』、杉浦健一の「南洋群島原住民の土地制度」をはじめ多くの論稿、松岡静雄『ミクロネシア民族誌』、矢内原忠雄『南洋群島の研究』、染木照『ミクロネシアの風土と民具』、土方久功『流木』、『サテワヌ島民話』などに代表される、長期ないしは集中的現地調査に基づく成果がある⁵⁾。これらの詳細で多岐にわたる視点からの民族誌や報告書は、半世紀を経た今日のミクロネシア研究にとっても、単に、文化変化を研究テーマにするだけにとどまらず、ミクロネシア文化の理解には

不可欠の資料となっている。

一九六〇年代に再開された日本の若手人類学者による調査研究も、家族・親族、社会組織、宗教、エスノ・サイエンスなどの分野で数多くの成果が集積されてきている。同時に、先史学の分野では、土器や貝斧などの遺物、住居跡などを手がかりに、諸地域での植民の年代測定や移住のルートに関して注目すべき作業仮説が提示されている〔Takayama 1979, 1981, 1982〕。また、言語学の分野、とりわけ、比較言語学やシンタクスの研究においても著しい成果があげられている〔Sakiyama 1979, 1982, Sugita 1980a, 1980b〕。それらの三分野の調査・研究の結果、現段階で日本人研究者から提案されているミクロネシア研究の主要な問題点のひとつは、ミクロネシアの民俗文化にみられる斉一性と個性とについてである。それは、とくに、考古学と言語学の分野で指摘されている、ミクロネシアを単一の文化領域とみなすことへの疑問であり、各地域の文化的諸相に発現する地域の変異に関する問題である。つまり、この問題提起は、ミクロネシア全域で、人間が居住している島数二二〇、総人口三〇万弱という、文字どおり「ミクロ世界」における民俗文化の普遍性と個性を、いかに位置づけ、総合的に把握するかということである。

考古学の資料によると、紀元前一五世紀ころ、すでに植民の形跡がみられるマリアナ諸島と、紀元後一〇世紀以降に植民がおこなわれたと推定される中央カロリン諸島との時代的差異があきらかである。また、土器製作の技術があったマリアナ、ヤップ、パラオの島々と、その存在が認められないトラック以東の島々との地域的差異もある。言語学の研究成果からは、ヘスペロネシア（西部オーストロネシア）語派に属す、チャモロ語、パラオ語と、メラネシア語派に包括されるそれら以外のミクロネシア諸語との対立が指摘されている。そして、七語群に分派したメラネシア語派のなかでも、トラック系言語を含む核ミクロネシア語群は、ニューヘブリデス北部の諸語と文法構成において、とくに深い関連のあることが例示されている〔Grace 1955, Shuter and Marck 1975〕。また、ポリネシア・アウトライアー（ポリネシアからの移民）であるカピంగాマランギとヌクオロの住民の言語は、あきらかに、ポリネシア語派に含まれる。このように、考古学や言語学の資料からも、ミクロネシア諸地域の文化の多様性がみてとれる。

この傾向は、物質文化の面でも顕著である。機織りの技術があったポナペ以西の島々とそれがなかったマーシャル、ギルバート諸島、石の基壇および鞍型屋根の様式

をとるパラオ、ヤップと地床および、切妻屋根の形式を特徴とするそれら以外の島々。また、嗜好品としてベテル・チューイングの習慣のあるマリアナ、ヤップ、パラオの島々、とそれが存在しないほかの島々。また、ポリネシアや東部メラネシアと共通する、儀礼の場でカヴァ（シヤカオ）を利用するポナペ島など、個々の文化要素を恣意的にとりあげただけでも、地域的な特徴を例示することができる。逆に、ミクロネシア全域に共通する要素も、栽培植物に限らず数多く例挙される。たとえば、カヌーのタイプを比較すれば、ミクロネシア地域は、シングル・アウトリガークアヌーを共有し、とくに、サンゴ礁島（低島）においては、大三角帆、左右非対称形の船体、船首、船尾同形の外洋航海用大型カヌーを使用してきた点で共通する。

他方、社会人類学の調査成果からも、いくつかの問題点が指摘されている。まず、政治・社会組織の面では、首長制国家にまで発展したポナペやコスラエ（クサイエ）社会、厳格な身分階層制をうみだしたヤップ、マーシャル、ギルバート社会と、性、年齢、親族関係上の地位に基づく以外に、社会階層が存在しないトラックや中央カロリンの社会といったぐあいに、地域的ないしは諸島ごとで大きな差異がみられる。また、関係（親族）名

称においても、ハワイ（世代）型を基調としながらも、クロウ型、イロコイ型といった変異が存在する。しかし、社会（親族）集団構成の原理に関しては、父系的傾向が強いヤップ社会、選系的要因が作用するギルバート社会のほかは、いずれも、母系性が卓越している。ただし、同じ母系的な社会でも、ポナペヤトラック社会では、ドイツ、日本の統治政策の影響で父方・夫方居住へと変化してきている。パラオ社会は、伝統的に、父方・母方オジ方居住の様式を特徴としている。

このように、ミクロネシアの民俗文化には、いくつかの顕著な個別性と普遍性とをみいだすことができる。これらの多様性を把握するためには、民族移動のルート、環境への適応のしかた、個別文化間における歴史的交流、統治国の支配の影響などの諸要因を考慮する必要がある。したがって、本研究班の目的も、そのような視点から、ミクロネシアの民俗文化の地域的変異の問題を、班員個人個人の調査資料に依拠しながら、相互に比較検討を試みたくうえで、総合的に解明することにある。

二、班の構成

それらの問題を広い視野から解きほぐすためには、豊富な現地調査の経験のある研究者の参加が不可欠であ

表1 班員の研究領域と調査地

氏名	所属	分野	調査地域
牛島巖(代表者)	筑波大学(民博併任)	社会人類学	ヤップ、西カロリン
石川栄吉	東京都立大学	民族学	ギルバート
青柳真智子	立教大学	社会人類学	パラオ
高山純	帝塚山大学	先史学	マリアナ、カロリン、ギルバート
清水昭俊	広島大学	社会人類学	ポナペ、コスラエ、マーシャル
杉田洋	東京学芸大学	言語学	トラック
小林繁樹	人間博物館リトル・ワールド	生態学	ヤップ
小松和彦	大阪大学	民族学	トラック、コスラエ
山本真鳥	東海大学(非常勤)	民族学	パラオ
河合利光	園田学園女子大学	社会人類学	トラック
杉藤重信	兵庫医科大学(非常勤)	民族学	中央カロリン
崎山理	民博第5研究部	言語学	パラオ、ヤップ
秋道智彌	" 第2研究部	生態学	パラオ、中央カロリン
石森秀三	" 第4研究部	社会人類学	ヤップ、中央カロリン、マーシャル
中山和芳	" 第1研究部	社会人類学	ポナペ
須藤健一	" 第4研究部	社会人類学	中央カロリン、トラック

る。そのために、本研究の班員は、異なる学問分野からのミクロネシア研究者によって構成されている。表1からもわかるように、班員は、先史学一名、生態学二名、言語学二名、社会人類学七名、民族学四名よりなる。そして、班員の調査地域も、パラオ、ヤップ、中央カロリン、トラック、ポナペ、マーシャルと、今年度に調査を予定しているコスラエ、ギルバートをくわえると、ほぼミクロネシア全域におよんでいる。とくに、ミクロネシア東部への民族移動の「要衝地」と目されてきたギルバート諸島で、世界の学界で初めて本格的な発掘調査が、班員の高山純氏によって実施されることになり、その成果に大きな期待が寄せられている。

三、研究経過および成果

この研究班は、昭和五七年度に発足し、二年計画で共同研究をおこなっている。五七年度には、八回の研究会を実施した。各班員の研究発表は、つぎのとおりである。

第一回 昭和五七年五月二二日

須藤健一 「ミクロネシアの交換論」

第二回 六月一九日

牛島 巖 「ヤップ島における女性の地位」

Ayres, W. (特別参加)⑥ 「ポナペ島の発掘から」

第三回 七月一七日

崎山 理 「西カロリンの言語的層」

杉田 洋 「トラック系諸語のシンタックス」

第四回 一〇月二日

中山和芳 「ポナペ島におけるキリスト教の受容」

石森秀三 「サタワル島におけるキリスト教の土着化」

第五回 一一月一三日

須藤健一 「トラック諸島のパン果儀礼」

山本真鳥 「サモアの政治コミュニケーション」

第六回 一二月一〇日

小林繁樹 「ヤップ島の生活空間」

青柳真智子 「パラオの新宗教」

第七回 昭和五八年一月二九日

清水昭俊 「ポナペ島における首長制政治構造」

牛島 巖 「ヤップ島におけるタロイモとヤムイモ」

第八回 三月二六日

秋道智彌 「ミクロネシアにおけるサブシステムス・エコノミー」

昭和五七年度の研究会では、主として、各班員の調査資料に基づいて、個別社会の具体的事例の報告に重点を

おいた。今年度は、ミクロネシア民俗文化の地域的変異をとらえる枠組を検討し、主要な文化要素ごとの比較研究に力点をおく予定である。なお、今年度は、すでに二回の研究会を開催し、前述の諸点を考慮したうえで発表がおこなわれている。

二年度にわたる本共同研究班の研究成果は、昭和五九年度に欧文の論文集の形で公刊する予定である。

註

- (1) 一九四四年から七四年にかけて、ミクロネシア地域の研究成果は、Mac MarshallとNasonによってまとめられ、出版されている。
- (2) 日本統治時代（一九一五年—四五年）に、ミクロネシア地域に関連するあらゆる分野の調査報告書、論文、著書は、畑中幸子らによって調べあげられ、文献集として出版されている。
- (3) Ayres氏は、アメリカのオレゴン大学教授で、オセアニア考古学の研究者である。昭和五七年三月—八月まで、日本学術振興会の招聘で、慶応大学に滞在した。彼は、最近ポナペ島のナンマトール遺跡の考古学的調査を数年にわたって続行している。

文献

Grace, G. W.

1955 Subgrouping of Malayo-Polynesian: a Report of Tentative Findings. *American Anthropologist* 57: 337-9.

HATANAKA, Sachiko

1979 *A Bibliography of Micronesia Compiled From Japanese Publication 1915-1945*. Research Institute For Oriental Cultures Gakushuin University, Occasional Papers No. 8.

土方久功

一九四三 『流木』小山書店（一九七四年、未来社より復刻）。

一九五三 『サテワヌ島民話』三省堂（一九七五年、アル・ノオトの復刻）。

Mac Marshall and James D. Nason

1975 *Micronesia 1944-1974: A Bibliography of Anthropological and Related Source Materials*. HRAF Press.

今西錦司編

一九四四 『ポナペ島—生態学的研究—』彰考書院（一九七五年、講談社より復刻）。

松岡静雄

一九二七 『ミクロネシア民族誌』岡書院（一九四三年、岩波書店より復刻）。

SAKIYAMA Osamu

- 1979 Genealogical Identification of Languages in the Western Carolines. in Kusakabe Fumio (ed.), *Report, Cultural Anthropological Research on the Folk Culture in the Western Caroline Islands of Micronesia in 1977*: 9-17.
- 1982 The Characteristics of Nguluan from the Viewpoint of Language Contact. in Aoyagi Machiko (ed.), *Islanders and Their Outside World: a Report of the Cultural Anthropological Research in the Caroline Islands of Micronesia in 1980-1981* : 105-128.
- Shutler, R. and J. C. Marck
1975 On the Dispersal of the Austronesian Horticulturalists. *Archeology and Physical Anthropology in Oceania* 10: 81-113.
- 梁木 煦
一九四五 『マクロネシアの風土と民族』 彰考書院。
SUGITA, Hiroshi
1980a *Trukese-English Dictionary*. American Philological Society.
1980b Some Evidence for Movement in Micronesian Relativation. *University of Hawaii Working Papers in Linguistics* 12-1: 21-31.
- 杉浦健一
- 一九三八 「パラオ島における聚落の二分組織に就いて」『人類学雑誌』五三、一〇五—一五頁。
一九四四 「南洋群島原住民の土地制度」『民族学研究所紀要』一、一六九—三五〇頁。
一九四九 「マクロネシア原住民の政治組織」『人文』三卷一号、二八—五二頁。
TAKAYAMA, Jun
1979 The Origin of Prehistoric Pottery in Micronesia. *Paper Prepared for the XIV Pacific Science Congress of Symposium LIII*.
1979 *Archaeological Survey in Micronesia for the Past Decade*. Ms.
1982 A Brief Report on Archaeological Investigations of the Southern Part of Yap Island and Nearby Ngulu Atoll. in Aoyagi Machiko (ed.) *Islanders and Their Outside World*: 77-104.
- 矢内原忠雄
一九三五 『南洋群島の研究』 岩波書店。
(第四研究部)